

図書館炎上

渡邊隼 専任講師

(都市環境論)

このたび「本や図書館に関する文章」というテーマで『ライブラリー』への原稿依頼をいただいて、どのような内容の随筆をしたためたものかと、しばし思い悩んでしまった。書きたいことが見つからなかったからではない。書きたいことがたくさんあって、取捨選択がむずかしかったからである。大学の教員・研究者という職業柄、ご多分にもれず、わたしもまた図書館で過ごす時間、図書館という空間に親しんできたつもり人間である。太平洋の海原をのぞむ東北の地方都市で過ごした幼少期から高校時代にかけては、自宅からさほど遠くない場所にあった公立図書館で、児童文学や小説、中学生・高校生向けの学術書から大人向けのノンフィクションまで、さまざまな書物を閉館時間になるまで読みふけたものだった。長じて大学に進学し、驚嘆したのは、大学図書館の存在である。それまで慣れ親しんでいた地元の公立図書館や中学・高校の図書館とおなじ「図書館」であるはずなのに、まったく別種の異空間に思われたからである。もちろん、両者は役割が異なるのであるから、単純に比較できないのだけれども、ありとあらゆる知を学問・研究のために蒐集する大学図書館という存在に初めて接し、おどろきとともに大いに魅惑された当時のことは、いまでも記憶のなかで色あせることはない。大学図書館の無数にならぶ書架のもとで時間をわすれて書物をひもといていると、ときに講義への出席など些事に思われ、忘却の彼方へ消え去ってしまうこともしばしばであった。大学図書館に入りびたる学生生活を送ることになったおかげなのかどうか、大学院へ進学し、幸か不幸か、まがりなりにも学問・研究の道へ進むこととなり、図書館とのつきあいも、それまで以上に、深く、永く、濃密に続くことになった。もっとも、職業的研究者ともなれば、趣味としての読書を楽しむための場所というよりは、どうしても「しごと」をする場所として図書館を利用する機会が多くなる。けれども、地元の小さな図書館で児童文学を読みふけていた小学生のころも、大学図書館の書庫にこもって文献・史資料を調べる職業的研究者となったいまでも、おもしろいことを探し求めたい、もっともっといろいろなことを知りたいという好奇心のありようはまったく変わらないように思えるのだから不思議なものである。

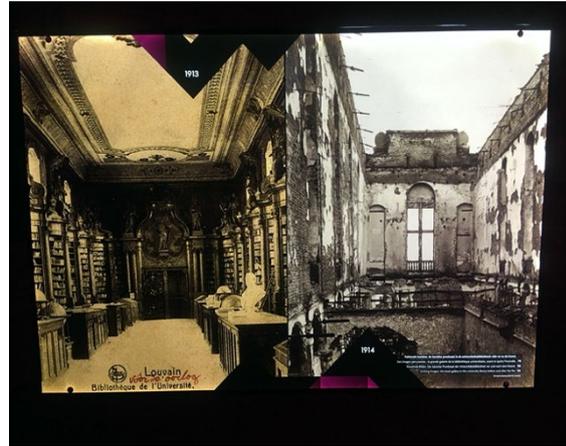
さて、ここまで書き連ねてきてもなお、「なにを書こうか」と逡巡しているのであるが、ここはひとつ、時事的な話題——いまだ収束／終息の見通しがたたないコロナ禍——にひき

つけて図書館を語ってみたい。それがタイトルにかかげた「図書館炎上」である。「図書館炎上」といっても、なにもどこかの図書館が広大なインターネットの銀河系の片隅でよからぬことをやらかし、敵にまわすと恐ろしいが味方につけると頼りないネット民の不評を買った結果として「炎上」した話をしたいわけではない。かつて戦火によって文字どおり「炎上」し、あまたの蔵書を焼失したベルギーのルーヴァン大学（KU Leuven: Katholieke Universiteit Leuven）の図書館を話題にしたいのである。カトリック系の大学として世界最古（1425年創立）のルーヴァン大学は、ベルギー本国のみならず、ヨーロッパの学問・研究の拠点のひとつである。そしてルーヴァン大学の図書館は、かつて二度の「炎上」を経験したことで知られている。一度目の「炎上」は、第一次世界大戦中のドイツ帝国によるものである。1914年のドイツ軍によるベルギー侵攻からほどなくして、ルーヴァン大学図書館は破壊しつくされ、30万冊もの蔵書が焼失した。大戦後、蔵書の多くを失った図書館再建のために、国際連盟の加盟国を中心に世界各国から書物が寄贈された。当時の日本からも渋沢栄一らが中心となり、1万4千冊ほどの貴重書が贈られたという。こうした経緯をへて、1928年、ルーヴァン大学図書館は一度目の「炎上」から復活するに至った。しかしながら、再建から12年後の1940年、第二次世界大戦の戦火にさらされ、ルーヴァン大学図書館はふたたび「炎上」することになった。二度目の「炎上」は、ナチス・ドイツによるものであった。ルーヴァン大学図書館はドイツの二度にわたる侵攻によって「炎上」したのである。二度目の「炎上」は、ルーヴァンの市街地がほとんど無傷であったのに対し、まるで大学図書館のみが標的にされたかのごとき惨状であったという。だが、第二次世界大戦の終結後、国際社会の協力により、図書館はふたたび復活を遂げる。ルーヴァン大学図書館の二度の「炎上」をめぐる背景については、ヴォルフガング・シヴェルブシュ（福本義憲訳）による好著、その名も『[図書館炎上](#)』に詳しい（Schivelbusch 1988=1992）。

世界がコロナ禍にみまわれる少しばかり前に、ルーヴァン大学図書館を訪れる機会があった。知人のドイツ人研究者に誘われ、ルーヴァン大学で開催された国際会議に参加した2018年2月のことである。首都ブリュッセルから鉄道で40分ほどの場所にあるルーヴァンの大学街で、日中は会議に参加し、終わるとそのまま大学近くのパブに流れ、ベルギー・ビールを飲みながら諸外国の参加者と密になって研究談義に花を咲かせた冬の夜も、コロナ禍のいまとなつては、はるか遠い昔のできごとのようである。滞在中、幸いなことに大学図書館を見学する機会をえた。次頁の写真は、大学図書館の外観と内部の様子である。



(写真はすべて筆者撮影)



先述した二度の「炎上」をふくむルーヴァン大学図書館の歴史は、図書館内の展示でたどることができる。上の写真は、ドイツ軍によるルーヴァン侵攻の様子（左上）と大学図書館の一度目の「炎上」の前後を比較した展示（右上）である。



ルーヴァン大学は、ヨーロッパにおける日本研究・東アジア研究の拠点としても知られている。上の写真は、日本をふくむ東アジア諸地域の史資料を所蔵するルーヴァン大学図書館内の東方図書館である。ところで、ルーヴァン大学文学部日本学専攻課程でベルギーにおける日本研究をながらく主導してきたウィリー・F・ヴァンドゥワラ名誉教授は、日本研究のために必要な古書、史資料をもとめて、来日時には必ずといってよいほど神田神保町の古書店街を訪れていたという（大内ほか編 2008）。いうまでもなく神田神保町の古書店街は、

日本大学図書館経済学部分館が所在する神田三崎町にほど近い場所にある。経済学部の図書館が充実しているのは、いまさらわたしが強調するまでもないことであるが、その大学図書館から歩いてすぐの場所に世界一ともいわれる古書店街が立地することは学究にとって大きな特権である。学生のみなさんが大学図書館を利用するさいには、ぜひ神田神保町の古書店街にも（コロナ対策を講じて）足を運んでみることを強くおすすめしたい。

話題をルーヴァン大学図書館にもどそう。かつて二度「炎上」した図書館を訪れたとき、まさかそれから2年後の世界で疫病が大流行し、感染者・死者が多数にのぼり、海外渡航はおろか、国内の移動さえも制限されることになるとは思ってもみなかった。世界のほかの地域と比べ、ヨーロッパ諸国における新型コロナウイルスの感染者数は急速な増加をみせていたが、とりわけベルギーの感染状況がきわめて深刻であると知らせる報道を悲痛な思いで見聞きしていた。国内外の移動のみならず、大学図書館、公共図書館の利用さえもままならない世界の到来は、まったく想像の範疇を超えていた。国際会議への参加、ルーヴァン大学図書館への訪問など、たやすく国境を越えて気のおもむくままに移動できたのも、未知のウイルスの脅威など感じることなく、さまざまな「自由」が保障され、それを享受していたからであると痛感させられた。ルーヴァン大学図書館を訪問したときの、あの凍てつくような寒さと小雪が舞う冬の空を思い出しながら、いささか大げさにいえば、コロナ禍で失われた「自由」の意味するところを考えざるをえなかった。

コロナ禍の現在、いまだ「自由」はさまざまな局面で制約されている。それでもなお、グローバル化ということばを持ち出すまでもなく、ひと、文化、社会の国境を越えた交流が途絶えることはないだろう。前出のヴァンドゥワラ名誉教授をはじめとするルーヴァン大学の日本研究グループは、一度目の「炎上」によって多くの書物を失った大学図書館へ当時の日本から寄贈された貴重書を主題とする書物を編んでおり、2022年に刊行予定であるという（Schmidt et al. 2022）。この書物が刊行されるころまでには、コロナ禍が終息し、ルーヴァン大学図書館を再訪できる日が来ること、そしてまだ訪れたことのない世界中の図書館を自由にめぐることができる日が一日も早く来ることを心から願って筆をおきたい。

[文献]

大内田鶴子・熊田俊郎・小山騰・藤田弘夫編, 2008, 『[神田神保町とヘイ・オン・ワイ](#)——
[古書とまちづくりの比較社会学](#)』東信堂.

Schivelbusch, Wolfgang, 1988, *Die Bibliothek von Löwen: eine Episode aus der Zeit
der Weltkriege*, Carl Hanser Verlag. (福本義憲訳, 1992, 『[図書館炎上](#)——二つの世
界大戦とルーヴァン大学図書館』法政大学出版局.)

Schmidt, Jan, Willy Vande Walle, and Eline Mennens eds., 2022 (forthcoming), *Japan's
Book Donation to the University of Louvain: Japanese Cultural Identity and
Modernity in the 1920s*, Leuven University Press.

著者自己紹介

渡邊 隼 (わたなべ しゅん)

宮城県生まれ。専門は社会学、都市地域研究。博士 (社会学)。日本学術振興会特別研究員
などを経て、2021 年度より日本大学経済学部専任講師。経済学部では、都市環境論、社会
学などの授業を担当。主な論文に『戦後日本における共同体の構想と現実』(東京大学大学
院人文社会系研究科博士学位論文, 2020 年) など。主な訳書に『[社会問題とは何か](#)』(ジョ
エル・ベスト著, 共訳, 筑摩書房, 2020 年) など。